

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520251

研究課題名(和文) 古代・中世における梵字悉曇を中心とする 文字 観の総合的研究

研究課題名(英文) Centered on the Sanskrit Shittan in ancient, medieval <character> view comprehensive study

研究代表者

小川 豊生 (OGAWA, TOYOO)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：50169190

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、三箇年にわたり各文庫に所蔵される中世宗教・文芸テキストの写本の発掘を通して、古代・中世日本における梵字悉曇を中心とする文字観の総合的研究の最終年度にあたるものである。本年度も引き続き、国文学研究資料館所蔵の関連マイクロ資料の調査・収集、金沢文庫所蔵テキストの調査・収集、高野山大学図書館所蔵テキストの調査・収集等を基軸に実施した。いずれも神道テキスト・密教テキストを重点的に収集した。また、文芸テキストについても如上の文庫を中心に探索し、適宜収集を行った。研究成果は口頭発表、学会誌上への寄稿、単著『中世日本の神話・文字・身体』(森話社、2014.5)の刊行という形で公表済みである。

研究成果の概要(英文)：This year also continued, survey and collection of Kokubungakukenyushiryokan Fine-related micro materials, survey and collection of Kanazawabunko holdings text, was carried out centered on research and collection, etc. of Koyasan University Library of text. However this year was mainly collected the Shinto text esoteric Buddhism text was investigated shortage in the previous fiscal year. Also, we were collected at the center of the same library also literary text. In addition, based on these documents, importance and of Sanskrit Shittan in Japan the Middle Ages, regardless of the classical literature, and even was discussed widely in character outlook formation. As a specific outcome, already has been announced as the paper, "The medieval Japanese mythology, character, body" as a summary of the entire study (Shinwa-sha, 2014.5) was published.

研究分野：日本文学

キーワード：梵字 悉曇 文字観 中世密教 中世神道 中世文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 古代・中世の古典学・宗教学において、梵字悉曇にかかわる諸問題は、これまで国語学および仏教学プロパーによって研究されるのみで、文学領域を含む広く文化史的な視点からアプローチされることはほとんどない状況にあった。この研究状況の転換が現在強く求められている。

(2) 近時、日本中世宗教文学の領域は、諸文庫・諸寺院に所蔵される未開拓の聖教関係の文献を対象とする調査・公刊が飛躍的にすすみ、新しい研究段階に入ったともいえる状況にある。こうした聖教文献の新開拓の現状にたつとき、それらテキストに含まれる梵字悉曇をめぐる問題はこれまでにない研究の可能性を喚起してくる。とくに、中世の梵字悉曇に関わる研究は、如上の成果にもとづきつつも、さらなる諸文献の発掘や梵字文化そのものの歴史的意義づけ等、斬新な展開が求められている。この研究はこうした背景や動機を前提にすすめられた。

2. 研究の目的

(1) 未開拓の諸文献の発掘を通じて、古代・中世の日本における梵字悉曇をめぐる知的教養の基盤を、新しい観点から文化史的に究明し、前近代に底流する文字観を領域横断的かつ総合的に闡明することを目指した。

(2) いわゆる顕密仏教や三国世界観によって規定された前近代の宗教・学芸の領域において、梵字悉曇に関わる文字・言語観の解明は極めて重大な意義をもつと考える。この分野は従来、国語学にかかわる悉曇学の専門領域にのみ任されていたが、近年の説話学・仏教学領域における聖教テキストの発掘や、中世神道研究の飛躍的な進展という事態によって、新たなアプローチを可能とする環境が整いつつあるといえる。文字の根源をめぐる神話的言説、神道説や密教教学における文字論、観想など修法実践における文字と身体との関係、和歌領域における言語意識と文字論、中世諸芸の文字観等々、重要にも拘らず等閑視されてきた古典学全般を支える文字論の総合的研究を目的としてすすめられた。

3. 研究の方法

研究全体は、一貫して、諸文庫・図書館等に所蔵された写本・版本類の調査、および復写の収集、分析を中心としてすすめられた。前記「研究の目的」のもとに、具体的には内外にわたる図書館・諸文庫等に所蔵される関係文献(写本)の探訪・調査・写真収集・複写物収集、および悉曇学や文字論・言語論にかかわる一般研究書籍(海外の研究も含む)・専門研究書籍の収集を主たる前提作業とし、そのうえで全体的な考察を深め、論文・著作として成果を発表することを各年度

の内容とした。手順としては、「研究の目的」中で記した内容を、各年次に重点的に振り分け、それぞれ作業達成目標とした。すなわち、24年度は(1)文字幻想をめぐる文化史的研究、(2)悉曇学書における文字観の文化論的研究、(3)宗教実践における文字と身体の関係についての研究、25年度は(4)直談抄テキストにみる言語思想の研究、(5)和歌・物語註釈テキストにみる文字思想、26年度は(6)古代・中世諸芸道の論書・注釈にみる文字観の変遷とその多様性をめぐる研究、(7)東アジアにおける文字・言語観の諸相を中心の課題とする。ただし当然ながら、各年度の作業は、相互に関連しつつ実現されるものであり、とくに調査の実施内容によっては各年度の目標を適宜並行させながら進行させることとした。

4. 研究成果

研究の全体の視点からいえば、これまで殆んど一部の専門領域に閉ざされていた梵字悉曇論を、広く文化史的に位置づけなおすころみに先鞭をつけることができたことと総括することができる。以下まず、成果の具体を、前記「研究の方法」における(1)~(7)に沿って記すことにする。

(1) 文字幻想をめぐる文化史的研究

まず前近代日本における文字の起源説について全体的に究明した。この起源説については、資料的な限界もあってかこれまで丹念に研究されることはなかった。しかし、近年の新出文献の堆積によって多様な起源説の存在を提示することが可能となったといえる。たとえば良遍の日本紀註釈文献、あるいは『日緯貴本紀』『天地靈覚秘書』『大和本紀』といった神仏習合テキストにみえる起源説、『小皮籠』等、東密秘伝書にみられる起源説、台密安然の諸文献、声明の秘伝書『魚山私抄』など、いまだ一般に知られていない日本の文字の起源をめぐる言説の総合的発掘と分析を通じて、新たな文字論への基盤を確保することができた。またとくに安然の悉曇学・文字観が与えた後世への影響など、和歌史のうえにも投影された平安期言語観念については、拙稿「和歌は我国の風俗なり 再攷」(『日本文学』第63巻5号、2014.5)で成果の一部を発表した。

(2) 悉曇学書における文字観の文化論的研究

田久保周誉、馬淵和夫を代表とする諸氏による悉曇研究を基礎としつつ、明覚『悉曇要訣』、信範『悉曇秘伝記』、了尊『悉曇輪略図抄』等々、未刊行のものも含めて悉曇学書における文字観を、晦渋な専門領域に閉ざすのではなく、ひろく中世文化全般の問題として捉え直すことができた。そのおおよそは、後記「主な発表論文等」に記載の拙著『中世日本の神話・文字・身体』(森話社、2014.5、

全 730 ページ) に所収の各論考のうちに吸収・発展して収録することができた。とくに第 部「幻像の悉曇」は、本研究(1)(2)の成果を直接的に集約して成り立っている。(既発表の論文も大幅に改稿増補して成ったものである。)

(3) 宗教実践における文字と身体の関係についての研究

中世の信仰世界で日常的に繰り返された梵字悉曇による「観想」という、前近代における宗教世界のきわめて基層的な実践形態を十分に文化学に組み込むことなしに、古代・中世を十全にとらえることは決してできない、という認識が本研究の出発点に置かれている。この研究では、阿字観、吽字義、鑿字義等に代表される、文字の観想と関わる密教の文字論を集中的に探究した。それによって、前近代において文字と身体とがいかに緊密な関係において捉えられていたか闡明することができた。とくに経典解釈において梵字がどのような位置を担ったかという問題については、「「解釈」される経典・経文、その動態と創造性をめぐって」(『説話文学研究』第 48 号、2013.7)などで考察した。また、本研究の重要課題の一つである文字観想と儀礼構築の問題をめぐっては、仏教文学会シンポジウムにおいて「南北朝動乱期における密教と神祇—性をめぐる異端的教説の水脈—」(仏教文学会、2014.9.20、学習院女子大学)と題して発表を行った。(なお「南北朝動乱期における神祇と密教 正統と異端をめぐって」と改題して、『仏教文学』第 40 号、2015.6 刊行予定、で公表する予定である。)さらに、前掲拙著『中世日本の神話・文字・身体』は、その全体が当該テーマを主題とした成果として位置付けることができるものである。(とくに第 部「愛染明王と修法の身体」、第 部「文字・観想・身体」所収の「胎内五位の形態学」「生殖する文字」は本研究の精華を盛り込んで成り立っている。)阿字観・吽字義・鑿字義に代表される文字の観想が、諸儀礼の根底でどのように機能しているかを闡明するとともに、とくに中世においてきわめて重視された瑜祇灌頂の核心的儀礼プロセスにおいて、梵字の観想がどのような意義を帯びて導入されていたかなど、これまで不明とされてきた問題群についても多くの新知見を得ることができた。

(4) 直談抄テキストにみる言語思想の研究

本研究は拙稿「和歌と直談 天台口伝法門の言語論的アプローチ」(『説話文学研究』第 43 号、2008)を起点として行われた。そこで基礎づけたように、多くの直談抄テキストのうちには、中世特有の言語論・文字論の領野がまだ研究されないままに放置されている。たとえば当体蓮華・比喻蓮華という教理は、その根底に天台教学特有の言語論がその基底に存在し、またそれは禅学との深

い関連のなかで把握されつつ、中世の思想全般を支える根幹的な言説を形づくっている。この研究では、禅学と直談抄との関連を悉曇文字観とのつらなりのなかで具体化することができた。その成果は、拙著『中世日本の神話・文字・身体』第 部「書物の中世」のうちに結実させることができた。本研究で開拓した新たな視座は、直談というジャンルを探究する際の、重要な意義を担うことになるものと思う。

(5) 和歌・物語註釈テキストにみる文字思想

70 年代以降進展しつづけてきた古典註釈テキストの発掘は、近代以降とはかけ離れた教養の質を中世が孕んでいたことを十分に知らしめてくれた。ここでは、特にその教養の典型として和歌言語をとらえ、多量に残された注釈書からその言語・文字観にかかわる言説を収集し、その文化史的意義について考察を深めた。その結果、中世文学テキストは従来の研究方法にとどまることなく、灌頂儀礼を典型とする、その生成の場、すなわち密教的教養を前提とする生成のメカニズムを深く考慮に入れて考察すべきことが明らかとなった。和歌灌頂(『玉伝深秘卷』や『阿古根浦口伝』など)や物語の灌頂テキスト(『伊勢物語髓』『伊勢伝神伝記卷』など)の研究成果は、前掲拙著『中世日本の神話・文字・身体』第 部所収「儀礼空間のなかの書物」を中心に展開した。

(6) 古代・中世諸芸道の論書・注釈にみる文字観の変遷とその多様性をめぐる研究

ここでは、たとえば最古の体系的作庭の理論書『作庭記』が、種々の禁忌を密教的な文字観との関連で説くこと、入木道の秘伝書『入木抄』や『東山往来』『夜鶴庭訓抄』など種々の往来物が、文字に関わる言説を記すことに表われているように、総合的な観点からの発掘によって悉曇学を新たな文字の文化学として位置づけなおすことが目指された。音曲や入木道の秘伝書に投影された梵字悉曇学の諸言説は、領域横断をかかげた本課題研究にとって重要な部分をしめている。資料的には本科研プロジェクトにおいて多くを収集することができたが、それらをどのように意義づける化については、いまだ原稿化する段階にはいたらなかった。最終年度後にすみやかにまとめた成果を公表したいと考えている。歌道のみならず音曲・入木道・読経道・作庭・有職故実等、中世の芸道における文字・言語観を総合的に解明することは今後も引き続き重要なテーマとしたい。少なくとも、そのためのベースとなる作業を本基礎研究で達成することができた。

(7) 東アジアにおける文字・言語観の諸相

本研究の締め括りとして、日本古代・中世の文字・言語観を「東アジア」という視点か

ら相対化して捉え直す試みを目指した。韓国・ベトナムの文献調査の蓄積のうえに立って、いわゆる梵・漢・和三国言語観研究の深化を試みた。具体的には拙稿「幻像の悉曇梵・漢・和三国言語観と文字の神話学」(拙著『中世日本の神話・文字・身体』第 部所収)、「東アジアからみる院政期日本の宗教文化——北宋新訳経典と明王信仰をめぐる」(小峯和明編『東アジアの今昔物語集 翻訳・変成・予言』勉誠出版、2012.7)、拙著『中世日本の神話・文字・身体』第 部所収「幻像の悉曇」などに結実した。ただし、本研究においては、当初、ベトナム、韓国の所蔵文献のさらなる調査蒐集が目指されたが、日程その他の理由により渡航かなわず、実現できなかったことは悔やまれる。今後の課題としたい。

以下、文献資料収集の具体について記しておきたい。

まず初年度及び二年度の研究では、前記(1)(2)(3)の研究を目的として、広く仏書・神道書・古典注釈テキストにみる文字の起源説の収集につとめた。すでに関連論文を執筆した際にある程度調査済みであったが、それに基づいて諸文庫・図書館を探訪し調査および資料の収集を実施した。具体的には、神宮文庫・天理図書館・金沢文庫・京都大学図書館などである。梵字悉曇にかかわる諸文献(写本・版本類)の調査・収集については、真福寺文庫・金沢文庫・高野山大学図書館・叡山文庫等に所蔵される仏典・神道注釈書の写本テキストを中心に調査・収集・分析を実施した。また、梵字悉曇を広く文化学に組み込むことをねらいとした本研究では、多くの未刊行のテキストの読解が求められた。例示すれば、空海『吽字義』の注釈である隆源『吽字義釈勘注抄』、頼瑜『吽字義探宗記』、定俊『吽字義聞書』、宥快『吽字義命息鈔』等や、道範『声字実相義抄』、頼瑜『声字実相義開秘鈔』、頼瑜『阿字秘釈』、理観『阿字観作法』、『阿字観私記』、実賢『秘密観要鈔』など、密教言語論の中枢に関わる写本群等々、これまでの密教研究上の資料としての位相とは異なる、いわば文字文化学の資料として最定位可能なテキストは極めて豊富に存在しており、その一部を収集することができた。

なお拙著の著述においては、古典籍のみならず、現代思想・哲学の分野の言語論・文字論・身体論をも広く参考に供したく、その関連文献の収集にも努めた。その成果は同書のうちに十分に顕示することができたと思う。

また前記(4)に関連しては、恵心流の口伝法門における言語観の探求を中心とした。とくに俊範・静明・政海・心賀・心聡・心栄・心源らの直談テキスト(『一帖抄』『二帖抄』『八帖抄』)に係する一連のテキスト、叡山文庫真如蔵『第二重伝受抄并私見聞抄』や『相伝七個条抄』、『天台宗要類聚』、『夷希集』な

どの諸文献、『理趣経直談鈔』、『十八道直談鈔』等の直談テキスト)の写本複写の収集を行った。それらの読解によって、中世天台の言語思想の掘り下げが可能となった。また、直談系テキストとともに見聞系テキストにも注目し、『灌頂見聞集』一卷(高野山三寶院蔵、平安時代写)、『護摩見聞思記』二卷(来迎院如来蔵、長元九年一〇三六写)、『胎金見聞』二卷(西教寺正教蔵、寛永十九年宮内卿写)や、『玄義大綱見聞』、『業見聞抄』と外題された卷子一卷(青蓮院蔵、応徳元年一〇八四写、良祐筆)、成賢の『護摩見聞思記』一冊(宝菩提院三密蔵、平安時代写)などの文献について調査・研究を行った。こうした見聞テキストが文字言語をいかに把握していたのか、その精密な究明が可能となった。また(5)については、古今注や伊勢物語注釈を中心とするテキストを対象とする調査・収集・研究を行った。とくに一連の伊勢注において「伊勢」の二字を起点に、男・女や定・恵、理・智、胎蔵・金剛、天・地、日・月といった対概念を操作する注釈方法が、『髓脳』や『玉伝深秘卷』など秘伝テキストの制作者たちの自由な構想によるものでなく、梵字悉曇に関する教養がその基底に介在していた問題については拙稿「赤白二帝と和合の古典学」(伊藤聡編『中世神話と神祇・神道世界』竹林舎、2011))で詳しく論じたところだが、ここでは改めて古典全般の注釈方法と梵字学との関連について考察することができた。(6)諸法道に関しては、『音曲秘要抄』、『教訓抄』等、楽書にみえる文字論をはじめとする中古・中世の口伝書等にみられる文字観念の実態についての総合的な探究のための諸文献の蒐集に努めた。なお、(1)~(6)の研究において、いずれも関連資料が国文学研究資料館のマイクログラフ資料中に所蔵されているものについては、同館における調査・閲覧を経て紙焼き写真・複写資料の収集につとめた。また真福寺文庫については、同文庫所蔵の悉曇関係資料を中心に収集を心掛けた。また金沢文庫所蔵の資料についても、既に翻刻紹介されたもの以外の、『理趣経』注釈、『瑜祇経』注釈、『菩提心論』注釈、あるいは見聞系テキストの諸抄を対象として収集した。

なお、本研究をよりアクチュアルなものにするため、近時刊行された「文字論」「身体論」に関わる関連書籍(海外研究の翻訳文献も含む)についても蒐集に努めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

小川豊生、「南北朝動乱期における神祇と密教 正統と異端をめぐる」、仏教文学(仏教文学会)、査読有、第 40 号、2015.6 刊行予定

小川豊生、「和歌は我国の風俗なり 再攷」、日本文学（日本文学協会）、査読有、第 63 巻 5 号、2014.5、44-52

小川豊生、「「解釈」される経典・経文、その動態と創造性をめぐって」、説話文学研究（説話文学会）、査読有、第 48 号、2013.7、1-4

小川豊生、「愛王の曼荼羅 円珍請来 愛王騎獅像 をめぐって」、アジア遊学（勉誠出版）、161 号、2013.3、176-183

〔学会発表〕(計 1 件)

小川豊生、「南北朝動乱期における密教と神祇— 性 をめぐる異端的教説の水脈—」、仏教文学会、2014.9.20、学習院女子大学（東京都新宿区戸山）

〔図書〕(計 2 件)

小川豊生著、森話社、『中世日本の神話・文字・身体』、2014.5、730 ページ

小峯和明編、勉誠出版、『東アジアの今昔物語集 翻訳・変成・予言』、2012.7、97-117 ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 豊生 (OGAWA TOYOO)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：50169190

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()